ポマ

川路　新吉

ポマ

　バシュッ

　なにかが弾けるような音が響いた。
　音のした方に何やら変わった動物がいた。
　一見するとただの、毛並みの良い犬のように見えるが、歩いているしなやかさはネコのようだ。
「ワーォ」
　その動物は頭を上げると、犬とネコの鳴き声が混ざったような奇妙な声を出した。
「どうやら成功したみたいね」
　白衣の女性が、動物にむかって、こっちへおいでととでもいうように手招きをした。
　動物はそれを察し、従順に白衣の女性のもとへ歩いて行き、足もとでとまった。女性が動物の鼻先に右手をかざすと、すっと後ろ足を折りたたみ床に座った。
「よしいいこね、お手」
　動物は、差し出された右手に前足を器用にのせた。
　その後女性は、ふせ、おかわりとさまざまな芸を続けざまに動物に試した後、おもむろに獣を抱き上げ、力いっぱい天井に向かって放り投げた。一瞬、驚いたように身をよじったが、空中で反転して、何事もなく、音もなく着地した。
「ようやく完成したわ。名前は何にしようかしら、ポチとタマだったのだから、ポマかしら、変な名前ね」
　女性は上機嫌でポマの頭を撫で回した。ひとしきり撫で回すと、ポケットから携帯電話を取り出して、どこかに電話をかけた。
「ひさしぶりねカナ。ちょっと遊びに来ない？」

「こんにちわーせんぱい」
　ようやく来たわ。全く遅いったらありゃしない。
「ようこそ、いらっしゃい」
「きゃーせんぱい、ペットかってるんですか？」
　カナはめざとくポマを見つけ、チッチッチとしたを鳴らして呼んでいる。
「これなんてドウブツですか」
「なんだと思う」
　カナはポマを撫でながら、しきりに観察している。
「イヌかなぁ。あ、でもネコっぽくもあるなぁ。うーんなんだろう。せんぱい、わかりません。おしえてください」
　カナの澄んだ瞳が私の方に向けられた。つい吸い込まれそうになる。

「正解は、犬でも猫でもあるのよ」
「どういうことですかぁ」
　甘ったるい声が神経を逆なでするが、こらえる。
「この動物は私が作ったの、犬と猫を混ぜて。しかもただ混ぜただけじゃないわ、お互いの優れた性質を併せ持ってひとつになるの、犬の社会性、凛々しさ、勇敢さと猫のしなやかさ、猫の可愛らしさ、好奇心を持っているのよ」
「せんぱいがつくったんですか？このこ。すごいです」
　まるで、自分のことのようにカナははしゃいだ。顔に似合わず豊満な胸が上下に揺れる。
「犬と猫だけじゃないわ、どんなものでも二つのものを掛け合わせることができる装置を発明したの。二つのものは掛け合わされて、それぞれの良いところだけが残り、悪いところはきえる」
「せんぱい、ノーベルしょうとかもらえるんじゃないですか？」
　キラキラと尊敬の眼差しをカナは私に向ける。
　つややかな黒髪、スラリとのびた手足、透き通るような肌。同じ女性として隣に立ちたくないタイプ。
　私が勝てるところと言ったら、頭脳ぐらいか。
　全く恨めしい。
　しかし、それも過去の話。装置の完成した今となっては、このような素晴らしい材料が近くにいたことを、神に感謝しなければ。
「それにしても久しぶりね。とりあえず座って」
　はーいとカナはソファと言うにはごつく、機材のついた椅子に何の疑いもなく座った。私も、その対面にある同じ椅子に座った。
　もうすぐ、カナの美貌は私のものになる。
　私はスイッチを押した。

　バシュッ

　目が覚めると見知らぬ風景がそこにあった。気絶でもしてしまったのだろうか、確かめるように辺りを見回す。特に、体にはおかしいところはないようだ。
　何をしていたんだっけ？
　少し思い悩んで、先輩の家にあそびに来ていたことを思い出した。
「先輩」
　呼びかけるが誰も返事をしない。
「先輩、どこに行ったんですか」
　家中を探してみるが、いるのは先ほどまでかわいがっていた動物だけだ。
　結局、日が暮れるまで探したが、見つかったのは、先ほどまで先輩が来ていたと思われる洋服と白衣だけだった。
「どこにいったんだろうね。ねえ、ポマ」

奥付

ポマ

http://p.booklog.jp/book/38515

著者 : 川路　新吉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/bowmoq/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/38515

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/38515

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.